

アパルトヘイトを知って学んだこと

中学二年

K・R

私がこのテーマを定めたきっかけは、読書の時間にネルソン・マンデラの伝記を読んだからだ。ネルソン・マンデラは、長年、アパルトヘイトと闘い続け南アフリカの大統領にまで登りつめた世界的にも有名な人物である。ではなぜ、アパルトヘイト政策という恐ろしい人種差別が行われてしまったのだろうか。

まず、アパルトヘイトとは、いったい何なのだろう。アパルトヘイトとは、オランダ語で人種隔離という意味である。名前の通り、人種を白人と黒人に分けた社会を作っていくことである。具体的には、白人と黒人の住む場所を分けたり、黒人にとって不利な生活をさせることだ。そして黒人は逆らったら殺されたり、拷問されてしまう。当時の南アフリカでは、アパルトヘイトは「政策」だったのである。これ程理不尽なことが正当化されてしまっていたのだ。この政策を決めたのは、誰であろう白人で構成されたアフリカーナー国民党であった。次に、ここで登場したアフリカーナーについてルーツを辿っていく。

一六五二年、南アフリカのケープという町に、初めてオランダ人が移り住んだ。彼らは、当時勢力のあった東インド会社という会社の一行の残りである。この何年前かに、東インド会社は資源もあり、アジアとの貿易の良い中継地点になると考え、ケープを訪れていた。その後、任務完了後にも残ったオランダ人たちは、移民であり、本国オランダでも地位が低い人々であったようだ。同じような理由で主にオランダや他の国からも、移民として国を追われた人々がどんどんケープへ移り住むようになる。このころの白人と黒人は、良い関係であったのだろうか。実は、既に白人による黒人差別は始まっていた。白人が増えていくにつれて、ケープに住んでいた黒人先住民たちの家畜を勝手に取り上げたりするなど、黒人に対して横暴な態度をとっていたようだ。無論、先住民は反発するわけであるが、白人には銃があった。こんな文明の利器を使われたらたまったものではない。黒人は反発しようにも、この文明の進み具合の違いのせいで抵抗することができなかつたのである。こうして、強者と弱者の関係が形成されてしまい、黒人は奴隷として働かされるようになってしまう。

さて、ここまでは南アフリカの一都市ケープの話であったが、アフリカーナーと呼ばれるようになるオランダ人たちは、南アフリカ全土に広がっている。そこにはイギリス人が関係してくる。

一八一四年にイギリス人は、領地を広げるためにケープへとやってきて、アフリカーナーからケープを奪い取り植民地とした。イギリス人も黒人を奴隷として扱っていたようだ。このころのヨーロッパには、強いものは弱いものを支配し、どんな扱いをしてもよいという考えがあると思われる。しかし、本国イギリスで

はそういった考えは薄れつつあったようで、それに影響されてイギリス人はアフリカーナーに奴隷を解放することを命じた。しかし、今まで奴隷に頼っていたうえ、イギリス人に従うということは避けたかったアフリカーナーたちは、南アフリカの様々な地へと移動していった。そして、その地の先住民たちを追い出し奴隷にしていき、トランスバールという地にアフリカーナーだけの共和国を作った。そこでも酷い条件で黒人を奴隷として扱ってきたようだ。そしてこの地では、大きな戦争が起こることになる。その戦争のきっかけとなったのが金鉱だ。広大な地のアフリカで、キンバリーという地に世界一大きなダイヤモンド鉱がみつかった。その後、トランスバールでも世界一大きな金鉱が見つかったのである。一攫千金を夢見たイギリス人はアフリカーナーと戦争をはじめ、イギリス側、アフリカーナー側、そして黒人側にも大きな被害が出る戦争となった。この戦いでは最終的にイギリス人が勝利した。戦後、イギリス人とアフリカーナーは、勝者と敗者の関係となったわけだが、当然イギリス人は裕福でアフリカーナーは貧しかった。しかし、白人の人数的には、アフリカーナーの方が多いため、イギリス人はアフリカーナーと和平の協定を結んだ。ここでイギリス人は、アフリカーナーと「黒人に選挙で参政権をもたせるか？」ということ議論をしたそうだが、アフリカーナーの大反対により、参政権を持たせないことになったようだ。一体なぜアフリカーナーたちは、大反対したのだろうか。アフリカーナーはもともと移民、つまり国を追われてきた人々であって、故郷に帰ろうにも帰る場所がない人々だ。それに、先ほど述べた通り、イギリス人の方が経済的にも立場的にも上であった。もし、黒人を自由にしてしまうと、どうなるだろう。白人に比べ何倍も多い黒人は、今まで奴隷にしてきたことを恨んでいるだろうから、あつという間に立場が逆転してしまうかもしれない。このような理由から、アフリカーナーには恐怖があった。つまり、今度は自分たちが迫害されてしまうかもしれない、という恐怖である。様々な面の問題に挟まれ、南アフリカにしか居場所がないとわかった彼らは、黒人に自由を与えず、迫害し続けるという道を選んだのだと思う。そして、白人だけが持っている参政権によって、アフリカーナー国民党が選ばれ、アパルトヘイト政策という残虐な政策が幕を開けてしまった。

さて、ここまでアパルトヘイト政策が長く続いてしまった理由を考えるにあたって、このようなエピソードを紹介したい。これはネルソン・マンデラにまつわる話である。ネルソン・マンデラは、アパルトヘイトに反対したとして二十八年間獄中に入れられていたわけだが、親切で穏やかな人柄から囚人たちにも人

気があった。ある日、そんなマンデラにアフリカーナーの看守が

「君たちは何がしたいのだ？世の中を驚かせてどうしたいだ？」と問いかけてきたことがあった。マンデラは

「私たちは、あなたが思っているように白人を海へ突き落とそうだななんて考えていない。(中略)ただ、どんな人も平等な権利を持ち、働いたものに富が再配分されるべきだと主張している」

と穏やかに語りかけた。それを聞いた看守は「それは、国民党よりまともではないか」と考え込んでしまったそうだ。他にもマンデラは、アフリカーナーの看守がマンデラを見て「こんな黒人もいるんだ」と安心した表情を浮かべていたと語っている。つまりアパルトヘイトで隔離され続けた結果、お互いのことを今まで知らなかったのだ。長い間の習慣、恐怖から、黒人に対して悪い先入観を持ってしまっただけ。どんな偏見があってもお互いを知らないことには何も始まらない。

このように、その人を理解することがいかに大切かということが黒人解放へのキーポイントにもなったようだ。現在、ネルソン・マンデラたちの活躍もあり、アパルトヘイト政策はなくなり、和解が進んでいる。私は今回調べていくまで、白人が黒人を迫害してきたという事実しか知らなかった。そのせいで心の中で「白人は何てひどいんだ。こんなに黒人を迫害し続けて残虐だ」と批判的に思い続けていた。迫害なんて絶対にやってはいけない。しかし、アフリカーナーたちには、追い詰められてしまった過去があった。恐怖があった。そこには、ヨーロッパの奴隷制度や強者が弱者を支配するという迫害が、普通に行われてきた文化、移民として差別されてきた歴史がある。迫害が迫害を起こし、歴史を繰り返してしまったのだと考えられる。私も、一方的に白人に批判意識を持っていたわけだが、今回、「知る」ことで考えを改めることができた。人を嫌ってしまうということは、どこの国でもどんな人でも日常的にあると思う。しかし、そのように人の嫌いな所だけを見つけて批判していたら、その人や他の人のいいところも見つけにくくなってしまふ。ネルソン・マンデラと同時期に活躍したデズモンド・ツツ大主教は言った。

「アパルトヘイトは黒人だけでなく、白人にとってもよいことではありません。何故なら、人間を愛するという大事なことを忘れてしまふからです」

私はこの言葉を白人、黒人、その他の人種も同じ人であり仲間であるのだから、人種で差別することは仲間を差別し、愛さないことであると解釈する。仲間を愛する、つまり仲間を考えて、思いやって行動することだ。これからは、苦手な人や嫌だと思ふ人がいても、その人について何か一つでもいいところを見つけ、その人について「知る」ということを心がけてみたいと思う。それでも自分と合わない人にも、皆平等に接していきたい。人を嫌ってしまうと自分も自然に嫌な気

持ちとなる。自分がその人のことを傷つけないためにも、距離をとってみるのも一種の手段かもしれない。傷つく人が減るためにも、自分のためにも、人との関わり方を考えていき、将来、社会で活かすためにも努力をしていこうと思う。

完

参考文献

筑摩書房

ちくま評伝シリーズ ネルソン・マンデラ

偕成社 伝記 世界を変えた人々 ツツ大主教

偕成社 伝記 世界を変えた人々 キング牧師